中学校における認め合いと支え合いと高め合い
―通常の学級における特別な支援に関する教育の推進―

田部 ゆか[1)]、是永　かな子[2)]、楠目　安由[1)]、新居 ちひろ[3)]、山下　花[4)]
1）高知市立三里中学校
2)高知大学大学院総合自然科学研究科教職実践高度化専攻・高知ギルバーグ発達神経精神医学センター
3）高知市立介良中学校
4）宿毛市立東中学校

Respecting and Supporting, Enhancing Each Other Among Students at Junior High School
; Promotion of Education Related to Special Support in Regular Classes

TABE Yuka[1)], KORENAGA Kanako[2)], KUZUME Ayu[1)], NII Chihiro[3)], YAMASHITA Hana[4)]
1) Misato Junior High School、 Kochi City、 Kochi Prefecture
2) Kochi University Graduate School of Integrated Arts and Sciences、 Professional Schools for Teacher Education、 Kochi Gillberg Neuropsychiatry Centre
3) Kera Junior High School、 Kochi City、 Kochi Prefecture
4) Higashi Junior High School、 Sukumo City、 Kochi Prefecture

要　約
本研究では、中学校における「認め合い」「支え合い」「高め合い」をテーマとした通常の学級における特別な支援に関する教育の推進のための方略について、具体的な検討を行った。結果として以下が明らかになった。第一に個別の指導計画の作成及び効果的な支援策の研究としては、個別の指導計画の内容をいかに授業場面で意識化するかを念頭に、支援のためのチェックシートを開発した。第二に、研究をより深化させるため、チーム会としての組織再編等を行った。第三に学校３年間のゴールイメージをもった特別活動、道徳、総合的な学習の時間などを計画的に実施して、毎年実施している「あったかアンケート」の結果を意識した教育活動を実施した。第四に授業においては、授業の構造化を推進するとともに全体への集団の支援としてファーストステージ支援のみならず、通常学級における個別の支援としてのセカンドステージ支援を具体化した指導略案を全教員で作成し、公開授業を行うに至った。

キーワード：中学校　通常の学級　特別な支援

1. 問題の所在と研究の目的
生徒一人ひとりの優れた特性や可能性を学校全体で育成していきたいとの思いから、研究主題を「学校行事や授業等を通して、認め合い、支え合い、高め合える生

徒の育成」、副題を「通常の学級における特別な支援に関する教育の推進」として、３年間、研究に取り組んだ。具体的には個別の指導計画の作成及び効果的な支援策の研究や、支援のためのチェックシートの開発、研究をより深化させるための組織再編、授業指導案における全体支援を想定したファースト(以下、1st)ステージ支援、と個別支援を想定したセカンド(以下、2nd)ステージ支援の明示等を行った。

生徒同士がつながりあい、お互いの意見を聴きあう関係を構築するために、基盤となるのは生徒同士の人間関係構築、学級づくりである。そのために３年間のゴールイメージをもった特別活動、道徳、総合的な学習の時間などを計画的に実施した。

そのために、体育祭や文化発表会などでは、生徒が主体となり、全員がそれぞれの良さを輝かせる行事をめざした。その経験が、お互いを認め合い、支え合う力となり、中学校卒業後の進路にも必ず活かすことができると考えたためである。

また授業においては、学力の定着を図ることが第一であり、授業の構造化を推進して、生徒の学力向上につなげた。

そして、帯学習の時間であるみさとタイムや家庭学習課題の内容を見直し、生徒会を中心に生徒の自治の力を伸ばし、充実した楽しい学校生活をおくることができることをめざした。生徒会目標である「みんなで築こう信頼という心の絆～0ne for all、 all for one～一人はみんなのために、みんなは一人のために」の精神を大事にしたいと考えていたのである。

以上を踏まえて本実践研究では、通常の学級における特別支援に関する教育の手立てに取り組み、特別な支援を要する生徒を全体で支援する体制を構築すること、それぞれの子どもが自己肯定感を上げ、特別支援教育を中心とした「認め合い」、学校行事を中心とした「高め合い」、授業づくりを中心とした「支え合い」のできる生徒になること、学級で楽しく授業を受けることができることをめざす仕組みを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1 研究対象期間および対象学級

本研究では2018年度から2020年度の３年間を対象に、公立中学校の１年生３学級、２年生３学級、３年生２学級、知的障害及び自閉症・情緒障害特別支援学級、肢体不自由学級もを含めた、全学年、全教職員によって推進された。第二著者は随時研修会の講師として参画した。

以下に年度に従って、着手した研究内容を示す。

3. 結果

3.1 １年目の取り組み

高知三里支部人権教育研究協議会主催の研修会の際に「通常の学級に在籍する特別な支援ニーズのある生徒における個別の指導計画の作成の実際について」と題し、研修会を開催した。

写真１ 保育所・幼稚園・小学校・中学校・各関係機関合同研修会

その研修会には２つの小学校から進学してくる生徒を想定して、現在小学校６年の子ども２名の個別の指導計画を保育所・幼稚園・小学校・中学校・各関係機関混成での班に分かれて、実際に作成した。

その内容としては、日常生活や学習の中でしんどい立場になりがちな児童に対して、発達障害のある子どもたちをはじめ、すべての子どもたちが分かる・できるように工夫・配慮された授業としての「ユニバーサルデザイン」を心がけ、さらにセカンドステージの生徒への支援に焦点を当て、個別の指導計画の作成の仕方や具体的な支援についてであった。

ここでセカンドステージを説明するために MIM について示す(図１)。

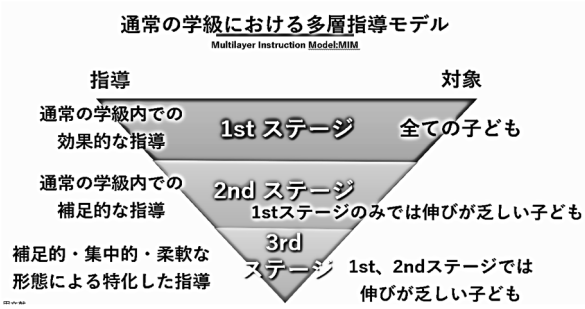


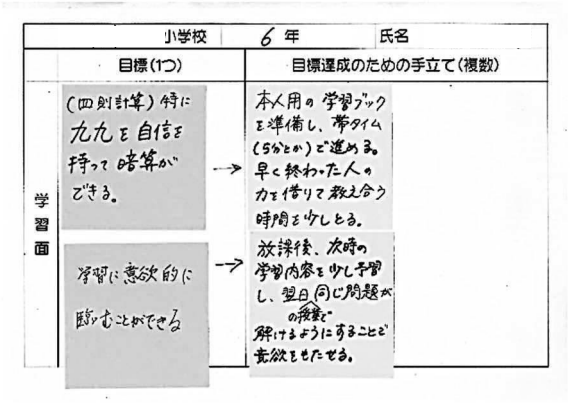
図１　通常の学級における多層指導モデル

MIM 公式 Website、http://forum.nise.go.jp/mim/?page_id=27

MIM は３層構造の指導体系であり、１st ステージ指導では通常の学級における指導の中で全ての子どもに対して実施する。2 nd ステージ指導では１st ステージ指導

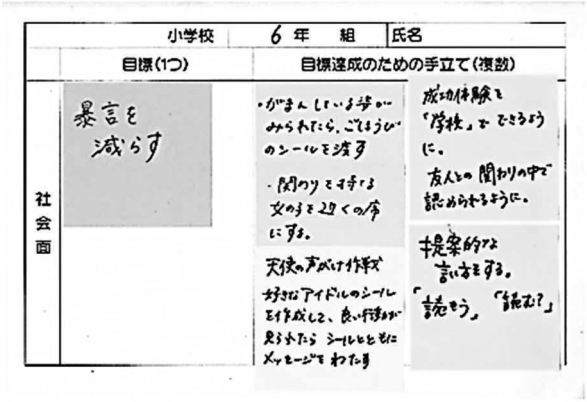
では伸びが乏しい子どもに対して通常の学級内で補足的な指導を実施する。３rd(サード)ステージ指導では２ndステージ指導でも伸びが乏しい子どもに対して学級内外で集中的、柔軟な形態による個に特化した指導を行う[1]。

資料１　研修会協議の結果



小学校	6 年	氏名
目標(1つ)	目標達成のための手立て(複数)	
学習面 (四則計算)特に九九を自信を持って暗算ができる。 →	本人用の学習ブックを準備し、帯タイム(5分とか)で進める。早く終わった人の力を借りて教え合う時間を少しとる。	
学習に意欲的に臨むことができる →	放課後、次時の学習内容を少し予習し、翌日同じ問題が出た時に解けるようにすることで意欲をもたせる。	

資料２　研修会協議の結果



小学校	6 年　組	氏名
目標(1つ)	目標達成のための手立て(複数)	
社会面 暴言を減らす	・がまんしている姿がみられたら、ごほうびのシールを渡す ・関わりを持った女の子を沢山の子にする。 天使の声かけ作戦 好きなアイドルのシールを作成して、良い行動が見られたらシールとともにメッセージをわたす	成功体験を「学校」でできるように。 友人との関わりの中で認められるように。 提案的な言い方をする。「読もう」「読む?」

このように１年目の研修会では、三里中学校区の保幼小中連携研修会を開催し、小６の児童の様子をふまえて検討を行い、通常学級での効果的な指導のみでは十分ではない 2nd ステージの生徒への支援に焦点を当て、個別の指導計画の作成の仕方や具体的な支援について資料１、２のように付箋を用いつつ協議を行った。

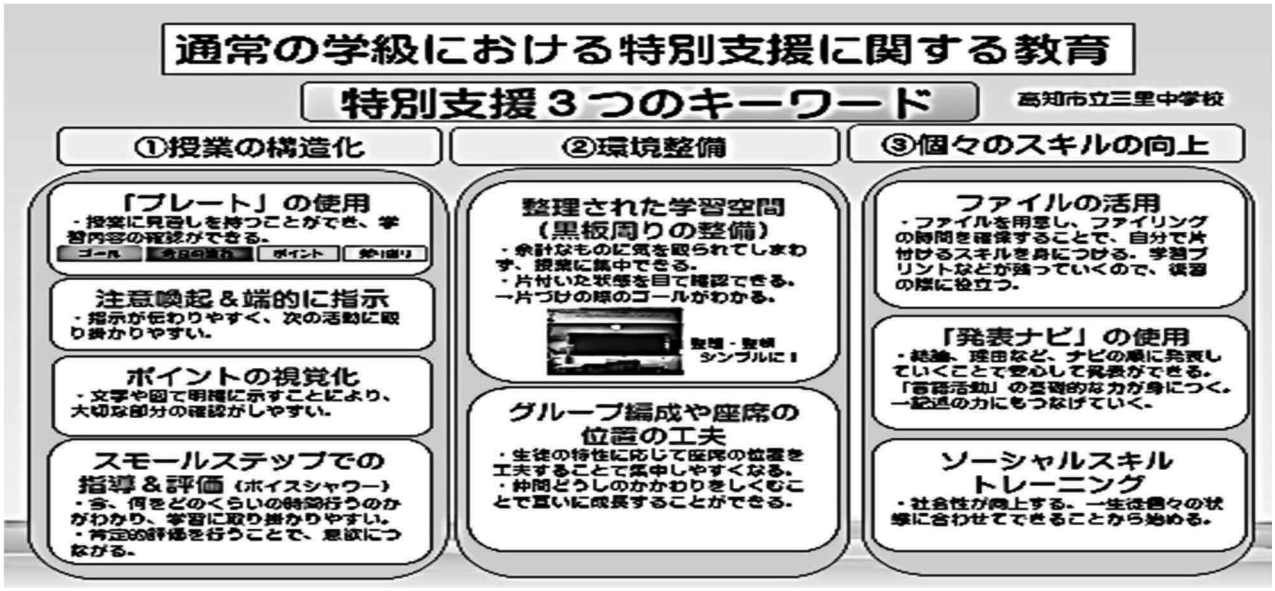
他にも随時の研修職員会では、生徒理解をすすめ、中学校区での小中連携を行った。生徒の実態を把握するために高知市の「あったかアンケート」を行い、生徒面談も行った。

体験学習ではエンカウンター（仲間づくり）を行い、海の体験、体育祭、文化発表会を通して関係構築を図り、全教科の授業では「プレート」を活用し、ゴールや流れを一目見て生徒が把握できるように構造化し、全教科でとり組んでいた(資料３)。三里中学校は 2018 年度以前に資料３のような全体への支援の工夫としての 1st ステージ支援は具体化されていたため、中学校としての教育的蓄積としての授業の構造化を進めるためのプレートの使用や環境整備、生徒へのスキル向上の取り組みは継続された。

以上を踏まえて、１年目の成果と課題としては、各保育所・幼稚園、小・中学校、関係機関合同での研修を行うことができ、互いの取り組みを知るとともに、情報交換をすることで理解が深まったことが指摘できる。

相互「批判」は相互に関する不十分な知識、共有場面の少なさ、とくに子どもを中心とした協議の不足によって生じる。そのため、一堂に会して対等な立場で子どもに関する意見交換を行う場の設定は重要である。

資料３　2018 年度までの通常の学級における特別支援に関する教育



3.2　2年目の取り組み

資料４ 「通常学級における特別支援３つのキーワード」チェックシート

「通常の学級における特別支援３つのキーワード」のチェックシート　高知市立三里中学校

① 国語科

1　授業の構造化＆あたたかい授業作り

	番号	内容	○× 1	2	3
1stステージ	1	プレートの使用。授業のゴールや流れをはじめに示し、見通しを持って活動できるようにする。			
	2	ポイントの視覚化。ポイントのプレートやチョークの色で大切なところを強調するなど、板書の工夫をしている。			
	3	大切な内容を伝える際には、注意喚起をしてから端的に話す。			
	4	板書を写す時間を確実にとっている。			
	5	板書の量を考え、写すことが負担にならないように工夫している。			
	6	難易度が違う活動内容や課題を用意し、生徒が選択できるようにしている。			
	7	１時間の授業の中で、活動に「静」と「動」のメリハリをつけるようにしている。			
	8	授業の開始時に生徒の机の上に必要なものだけが出ているかチェックしている。			
	9	課題が早く終わった生徒には、次の課題を提示している。			
	10	友だち同士教えあう場面を設定している。			
	11	机間指導時、生徒の間違いはそっと指摘して、ヒントを出すようにしている。			
	12	注意喚起をしてから活動を一度止め、端的に指示を出している。			
	13	大切なことはキーワードを繰り返したり、文字や図で視覚的に提示したりしている。			
	14	生徒が好きなことや得意なことを、授業や学級経営に取り入れている。			
	15	結果より努力したことを具体的に、スモールステップで評価するようにしている。			
	16	生徒の発言は、正解でなくても大切にしている。			
	17	順番に当てるときは「パス」も認めるようにしている。			
	18	自尊心を傷つけるようなしかり方はしないようにしている。			
2n	1	全体指導の後で、やるべきことができているかを個別に確認するようにしている。			
	2	学習内容によってはヒントカードを準備し、渡すようにしている。			

2　環境整備

	番号	内容	1	2	3
1st	1	黒板の周りには余計なものを貼らずに学習に集中できるようにしている。			
	2	教室を整理整頓し、片付いた状態にしている。			
	3	教師の机や机の上の整頓、戸棚の目隠しをして、気が散ってしまわないようにしている。			
	4	机の横にできるだけ物をかけないようにし、活動しやすくしている。			
	5	みんなで使う物の置き場所や片付け方を決め、わかりやすく目印をつけている。			
	6	机・いすの消音対策をしている。			
	7	学習で使用する用具や教材などは、１週間以上の余裕を持って知らせている。			
	8	忘れ物をした生徒に、貸し出しができる用具類を準備している。			
	9	学習しやすいグループ編成や座席の位置の工夫をしている。			
	10	朝、生徒よりも早く教室に入るようにしている。			
2nd	1	ロッカーや机の中の仕切りやカゴを準備して、整理整頓がしやすいようにしている。			
	2	ロッカーや机の中のチェックをこまめに行っている。			
	3	生活日誌への記入ができているかを、毎日チェックするようにしている。			

3　個々のスキルの向上＆ルールの明示

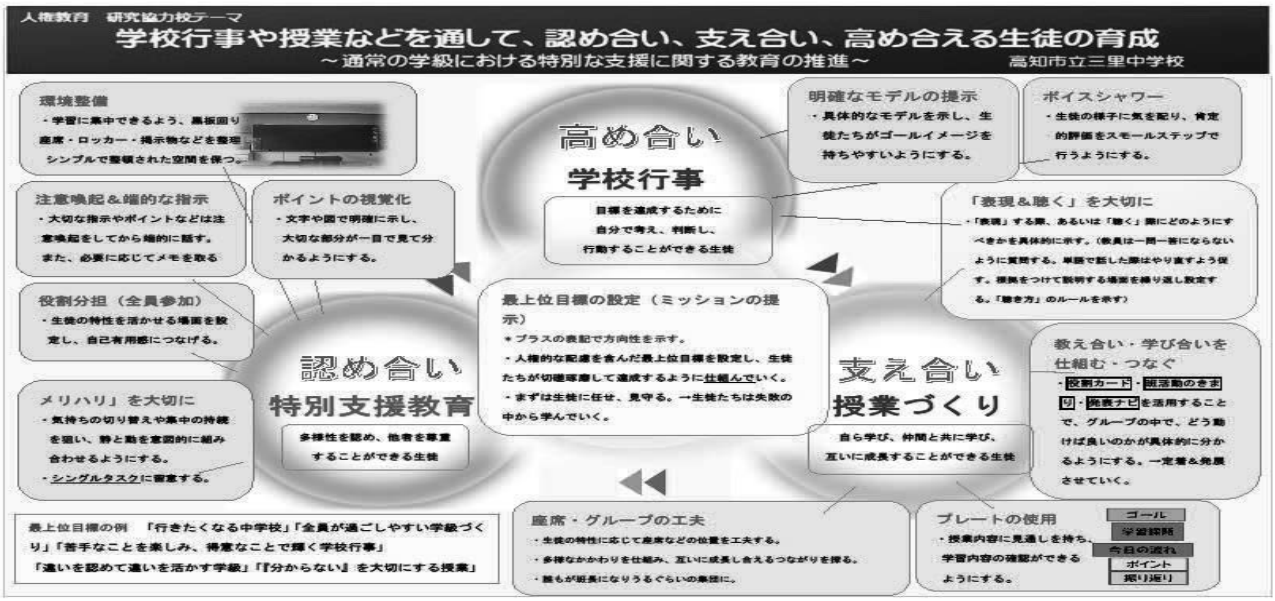
	番号	内容	1	2	3
1stステージ	1	学習プリント類は配布時に整理(ノートに貼る、ファイリングする)できるようにし、確認している。			
	2	連絡プリント類は配布時に連絡ファイルに入れるように習慣づけており、確認している。			
	3	時間の区切りを明確に提示し、時間の決まりは最優先に守るように指導している。			
	4	学習中の正しい姿勢を指導している。(体は前に向ける。足は机の下に。いすをひく。)			
	5	授業中の発言の仕方など、話し方のルールを決めている。			
	6	場に応じた言葉遣いなどを指導している。			
	7	人の話を聞くときは体を向け、最後まで聞くように指導している。			
	8	「わからない」と言えることや、間違えることの大切さを指導している。			
	9	当番や係、委員会などの仕事を最後までやり遂げるように指導している。			
	10	不適切な行動には一貫した態度や行動をとるようにしている。			
	11	不適切な行動には、指導だけでなく、適切な行動を示すようにしている。			
	12	きれいな言葉遣いや肯定的な表現をするように心がけている。			
2nd	1	重要な伝達事項はメモを書いて渡したり、保護者に電話で伝えたりするなどしている。			
	2	必要に応じて、このようなときにはこうするなどのソーシャルスキルトレーニングを行っている。			

4　国語科で特に留意する支援

	番号	内容	1	2	3
1st	1	視覚教材で思考の支援をする。			
	2	興味をひく導入を心がける。			
	3	言語事項の内容の時にはグループ活動を取り入れ、教え合いができるようにする。			
2n	1	T2がいる場合は記録をとり、それを分析して次時の声がけの仕方、課題などを意図的に設定する。			

2 年目は個別の指導計画の作成と効果的な活用の仕方についての研修を行い、授業のユニバーサルデザインの特に通常学級における個別の支援としての「2nd ステージ」の支援についての共通理解を図った。個別の指導計画は作成されるものの、通常の授業との連動が図られていない場合が多い。特に本研究では通常の学級における特別な支援の具体化が課題であるため、日々の一斉指導において以下に個別の配慮を提供するかが重要である。

資料５　研究構想図



第１回の研修会では、事例研究の後、教科部会に分かれて日々の実践を振り返り、「通常学級における特別支援３つのキーワード」チェックシートを高知県教育センター版「校内支援体制のチェックリスト」[2]をもとに資料４に示すように作成した。とくに通常学級における 1st ステージと 2nd ステージを対象とした支援内容を、全教科共通の支援項目として①授業の構造化&あたたかい授業作り、②環境整備、③個々のスキルの向上&ルールの明示とした。各教科独自の支援項目としては、④教科で特に留意する支援の４つの項目にまとめた。

その上で認め合い、支え合い、高め合える生徒の育成の為に必要なことについての話し合いを全教職員で行い、今後取り組む研究構想図を資料 5 のように完成させた。

他にも随時の組織職員会における生徒理解をすすめ、体験学習でのエンカウンター（仲間づくり）を行った。継続的に高知市の「あったかアンケート」と生徒面談、研修会を行い、認め合い、支え合い、高め合える生徒の育成の為に必要な学校の体制つくりを考える構想図の元を考えるために、生徒会の専門委員会ごとに「今できること「今後取り組んでいくこと・継続していくこと」などを話し合った。

結果として 2 年目には、事例研究やチェックシート、研究構想図の作成を教職員全員で行う過程の中で、特別な支援を要する生徒への支援のあり方についての共通理解がさらに深まり、意見を出し合い、研究構想図を作成することができた。この構想図を基にどのように実践し、その内容を達成していくのか。校務分掌や生徒会活動などと関連付けながら研究が学校全体に浸透するようにしたいと総括した。

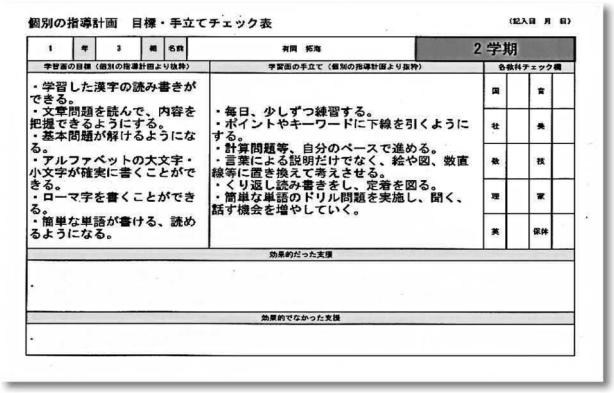
3.3　3 年目の取り組み

3 年目は、過去 2 年間の成果と課題をふまえ、「認め合い、支え合い、高め合い」の 3 つのキーワードをもとにした取り組みを進めていくために、チーム会を組織し、それぞれの取り組みを強化しつつ、あたたかい学級づくりに取り組むこと、わかる授業を目指すこと、生徒の自治力を伸ばすための委員会活動などの充実を図ることなど、一人ひとりが夢の実現に向けて努力する生徒に育つように取り組んだ。

そして生徒の変容を見取るために、あったかアンケートを活用し、平均点が低い項目に焦点を当てて取り組むこととした。昨年度からの継続でチェックシート（通常の学級での授業で「特別支援の 3 つのキーワード（授業の構造化、環境整備、個々のスキルの向上）」「各教科で特に留意する支援」「効果的だった支援」「改善が必要な支援」）を学期ごとに各教科担当に実施した。

昨年までの取り組みが有効であるかの確認、強化を各チーム会で行うことに加え、個別の指導計画に書かれている学習面の内容を抜粋した資料 6 に示される「個別の指導計画　目標手立てチェック表」を使い各教科担当教科会などで支援の必要な生徒の学習面の目標を共有し、意識して手立てができるようにした。その上で授業でも資料 7 に示されるような個別支援を指導略案に記載した。

資料 6　個別の指導計画　目標手立てチェック表



個別の指導計画　目標・手立てチェック表　（記入日　月　日）

1	年	3	組	名前	有岡　拓海	2 学期

学習面の目標（個別の指導計画より抜粋）	学習面の手立て（個別の指導計画より抜粋）	各教科チェック欄
・学習した漢字の読み書きができる。 ・文章問題を読んで、内容を把握できるようにする。 ・基本問題が解けるようになる。 ・アルファベットの大文字・小文字が確実に書くことができる。 ・ローマ字を書くことができる。 ・簡単な単語が書ける、読めるようになる。	・毎日、少しずつ練習する。 ・ポイントやキーワードに下線を引くようにする。 ・計算問題等、自分のペースで進める。 ・言葉による説明だけでなく、絵や図、数直線等に置き換えて考えさせる。 ・くり返し読み書きをし、定着を図る。 ・簡単な単語のドリル問題を実施し、聞く、話す機会を増やしていく。	国　　音 社　　美 数　　技 理　　家 英　　保体

効果的だった支援
・

効果的でなかった支援
・

資料 7　個別支援の記述されている指導略案

○単元名：単元3　電流とその利用　1章　電流と回路（大日本図書）

○目　標：回路を流れる電流を測定する実験を行い，各点を流れる電流についての規則性を見いだす

○展　開

学習活動	予想されるつまずき	教師の働きかけ ○全体の支援 ●全体の中でより個別に着目した支援
1.　電気用図記号の小テストに取り組む。	・振り返りシートが紛失しており，小テストに取り組めない。	●余分に振り返りシートを用意しておき，筆記用具を持つまで見守る。(Ⅳ) ●書き始めないときには筆記用具を持たせる。
2.　本時のゴール・学習課題を確認する。 【ゴール】 回路を流れる電流の規則性を知る。 【学習課題】 直列回路と並列回路の電流の流れ方にはどのようなちがいがあるだろう？		○机間指導で【ゴール】・【学習課題】が記入できているか確認する。できていたら褒める声掛けをする。 ●取り組めていない場合は，グループの生徒にノートを見せるように促す声掛けを促す。(Ⅰ)
3.　直列回路と並列回路の各点で流れる電流の大きさを調べる（実験2）	・何をすればよいかわからず，豆電球・電池で遊ぶ。	○実験でつくる直列回路と並列回路の写真を各班に配付し，スムーズに回路がつくれるように促す。(Ⅱ) ●「aの部分の豆電球を繋いで」など具体的に活動の指示をする。(Ⅱ)
4.　実験結果から，学習課題について考察する。(グループ→個人)	・書く気力がなく，伏せてしまう。	○実験結果・考察をまとめるワークシートを使い，結果から気づいたことを箇条書きにできるようにする。(Ⅳ) ●ワークシートの一部（結果など）を指定し，その部分は確実に記入させる。(Ⅲ) ●書き終わった生徒のワークシートを貸すように促す。
5.　全体で共有する。		
6.　本時の振り返りを行う。	・2枚目の振り返りシートも紛失し，やることがなくなる。	●今日の授業で頑張れたことを伝え，励ます。(Ⅴ)

Ⅰ：環境の工夫　Ⅱ：情報提示の工夫　Ⅲ：活動内容の工夫　Ⅳ：教材・教具の工夫　Ⅴ：評価の工夫

チーム会は資料 8 に示すように「認め合いチーム」、「支え合いチーム」、「高め合いチーム」を編成し、認め合い、支え合い、高め合える生徒の育成のために必要な取り組みについて、3 年目に校務分掌にチーム会を設置し、縦横斜めの連携を取りやすくした。

資料８　チーム会編成

認め合いチーム	支え合いチーム	高め合いチーム
特活主任（リーダー） 研究主任／図書館チーフ 各学年担当	**道徳主任**（リーダー） 人権教育主任／生徒指導主事 特別支援コーディネーター 各学年担当	**総合主任**（リーダー） キャリア担当／体育主任／美術主任／生徒会担当／防災担当／保健主事
○朝学活・終学活 ○学級活動 ○学年行事 ○エンカウンター ○あったかアンケート ○認知機能強化トレーニング ○授業規律づくり ○加力について ○生徒面談 ○特別活動の授業計画	○道徳の授業計画 ・道徳参観日、道徳研 ・道徳意識調査　　等 ○人権教育 ○平和教育 ○特別支援教育 ○生徒指導（生活規範）	○防災教育 （避難訓練、防災講演会） ○キャリア教育 ・社会人講話 ・キャリアパスポート　等 ○学校行事 （文化発表会、体育祭） ○掃除の取り組み （無言清掃、クリーン作戦） ○総合の授業計画

具体的には認め合いは特別支援教育を意味しており、多様性を認め、他者を尊重することができる生徒をめざす。よって構成員は道徳チーフ、人権、特別支援、生徒指導、各学年１名である。

次に支え合いは授業づくりを意味しており、自ら学び、仲間と共に学び、互いに成長することができる生徒をめざす。よって構成員は特活チーフ、研究、図書、各学年１名であった。

最後に高め合いは学校行事に注目しており、目標を達成するために自分で考え、判断し、行動ができる生徒をめざす。よって、構成員は総合チーフ、進路、体育、音楽、美術、防災、保体、各学年１名とした。

そして、写真２に示すようにチーム会に基づいて取り組むべき内容を決定し、共有した。

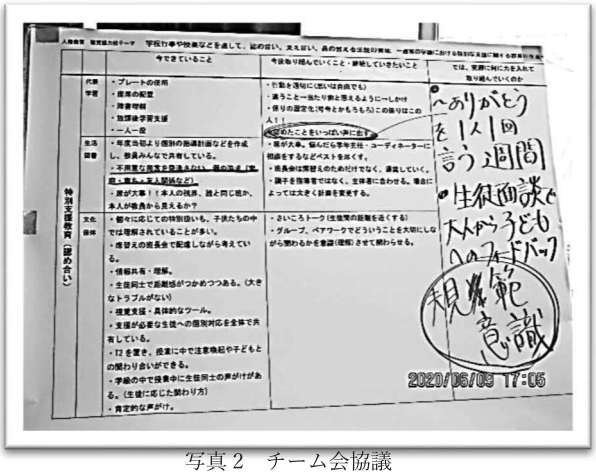


写真２　チーム会協議

生徒理解は組織職員会と夏季校内研修で実施した。生徒面談は引き続き学期ごとに実施した。研修会では、個々のニーズに迫った効果的な個別の指導計画の作成とその活用方法についての共通認識を図り、通常の学級の中での特別な支援を意識しながら、その他の生徒へも有効な手立てを考えていくこととした。

そして子どもの成長の評価としては、「あったかアンケート」を活用した。平均点が低い項目に焦点を当てて介入を行った。とくに３年目は６月と９月にあったかアンケートを実施し、その結果を分析することによって成果を考察した。

あったかアンケートは「自分らしさアンケート(10 項目)」「学級風土アンケート(23 項目)」のとてもそう思う 4、少しそう思う 3、あまりそう思わない 2、全くそう思わない１の４件法からなるアンケートである。あったかアンケートの「自分らしさアンケート」では、すべてのクラスにおいて、自己信頼得点の平均が低く、自己肯定感の低さが顕著に表れていた。

特に、資料９に示されるような、①「私は、自分の言っていることが正しいと思う」②「私は、自分のことが好きである」⑤「私は、周りの人の役に立っていると思う」の項目においては、すべての学級で平均が 4.0 点満点中 3.0 を下回っていた。

他にも「学級風土アンケート」では平均が低い項目の中で、⑰「私の学級は、人をからかったりしない」⑪「私の学級は、自分のことを安心して話せる」は、自己肯定感の低さによるものだと考えられた。

資料９　自分らしさアンケート項目

1　私は，自分が言っていることは，正しいと思う。

2　私は，自分のことが好きである。

3　私は，つらいことがあっても，強く生きていけると思う。

4　私は，自分には自信の持てるところがあると思う。

5　私は，周りの人の役に立っていると感じる。

これらの結果から、「自己肯定感」を高めるためのアプローチが必要だと考察した。

それを受け、「高め合いチーム」からの提案として、他者評価を行う機会を作り、周りから評価されることで自己肯定感が上がるのではないかとの仮説を立て、キャリアパスポートに「１学期頑張っていた友達をみつけよう」を追加して、実施した。結果として学級通信に、「１学期頑張っていた友達をみつけよう」の結果を「いつも元気で過ごしていた人」「みんなを楽しませてくれた人」「授

業を真面目に頑張れた人」「掃除を頑張っていた人」「友達に注意や声掛けができた人」「給食の準備を頑張っていた人」「読書をしていた人」「係・委員会の仕事を欠かさずできた人」として、個人名を記載して、配布した。また学級づくりとして、「大なわチャレンジ」や「学級エンカウンター」「自己理解ワーク」に着手した。

他にも代表委員会が行っている行事後の「ありがとうメッセージ」や、特活での「エンジェル・ハート」、総合での「他者評価」、道徳の時間を活用しての「ふわふわ言葉・チクチク言葉」、生徒面談をはじめとした教員集団のボイスシャワーの徹底など、今ある取り組みを強化していくことが有効と考えた。

他にも昨年度からの継続でチェックシート（通常の学級での授業で「特別支援の３つのキーワード（授業の構造化、環境整備、個々のスキルの向上）」「各教科で特に留意する支援」「効果的だった支援」「改善が必要な支援」）を学期ごとに各教科担当に実施した。その具体化として写真授業では黒板周りスッキリさせ、ICT を意識して活用した。

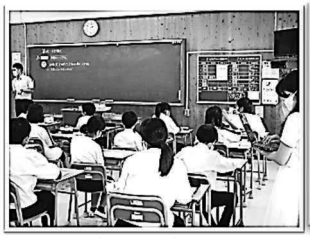


写真３　黒板周り

写真４　ICT 活用

２年目から実施している「特別支援の３つのキーワード」は学期ごとに簡単に○×でチェックをし、教員の見落としがちな手立てを意識できるように、また「個別の指導計画　目標手立てチェック表」ではより個人に迫った手立てを実践できるようになった。

4. 研究の成果と今後の取組

4.1 研究の成果

以下に本実践研究の成果を示す。あったかアンケートの分析を通して、短期間では十分な成果が上げられないという課題も見えてきた。そこで研究を始めた３年前にさかのぼってあったかアンケートを見直した。

現３年生の３年間のあったかアンケートにおける自己信頼得点の経年変化を検証すると、１年次は自己信頼得点が低かった生徒集団であったが３年次には全ての項目で上昇が見られた。自分らしさアンケートでは、第１回目では自己信頼感の５項目が全て低いことから、自己肯定感を上げる取り組みを全校で行ってきた。

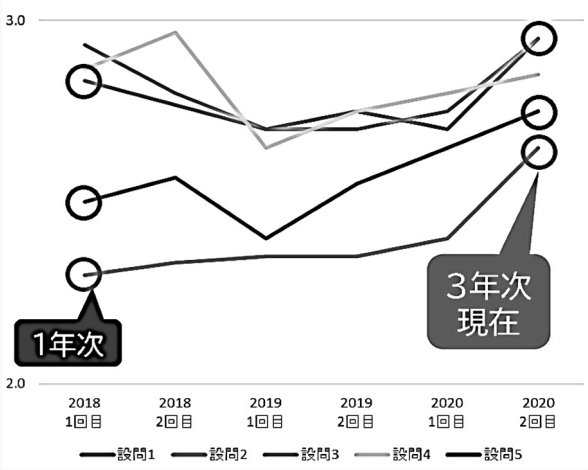


図２　あったかアンケートの分析結果

その結果、「自分らしさアンケート」では第１回目に全校平均で一番数値が低かった②「私は、自分のことが好きである」という項目が 2.44 から第 2 回目では微増ながら 2.46 に上昇した。第 1 回目には 4 番目に低かった④「私は、つらいことがあっても、強く生きていけると思う」が 2.82 から第２回目には 2.91 に上昇した。自己信頼感の領域 5 項目のうち、3 項目が第 1 回より上昇していたが、他者信頼感の領域 5 項目のうち、4 項目が下がっていた。

「学級風土アンケート」の比較からは以下が示された。第１回目で全校平均の低かった５項目のうち上昇していたのは、全校平均で低い項目である③「私は学級の誰と同じグループになっても楽しむことができる」の 3.04 が、第 2 回目では 3.07 に上昇していた。その他の 4 項目⑪⑭⑯⑰は下がっていた。ちなみに第２回目のアンケートで上昇していた項目は⑨「私の学級では悩みを聞いてくれる人がいる」と㉑「私の学級は間違ったことを言ったりした時、注意しあうことができる」であった。

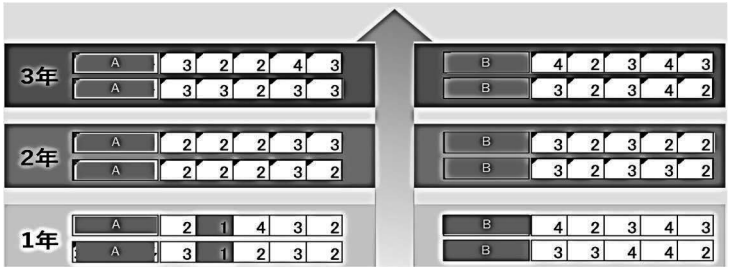


図３　個別の指導計画を作成している A,B の変化

生徒たちの自己肯定感の数値が上昇した項目に関しては、いくつかの成功体験があったこと、周囲からのボイスシャワーやプラスの声がけの一定の成果と考察する。他者信頼感を上げるためには、日々の学校生活の中でお

互いのことを思いやれる経験ができるような手立てが必要であろう。

そして図３に示す、個別の指導計画を作成しているが基本的に通常学級で学ぶ生徒A、B、２人の３年間の変化を見たところ、Aは「１」評価がなくなり、数値全体が上昇した。Bは２年次からの数値の上昇がみられた。

他にも成果としては1stステージ、2ndステージ支援を意識することで、その他の生徒や学級集団への理解を深めることができたことが上げられる。学校全体による自己肯定感をあげるという意識的な取り組みが、低い数値の改善につながることを実感できた。

また年３回のチェックシート「通常の学級における特別支援３つのキーワード」の活用により授業改善や手立ての充実を図ることができた。

そしてチーム会が組織されたことで、取り組みを推進しやすい環境が生まれた。また、チーム長が研究推進委員会に入ることで、学校全体への取り組みの統一を図ることができたことも指摘できる。

さらにあったかアンケートの分析のフィードバックや、チーム会ごとの取り組みの検討などを通して、教員集団の特別支援に対する意識が高まったことも言及しておきたい。生徒の変化としては自分の意見を言えるようになって、グループ活動でひっぱってくれる生徒が増えたとの意見があった。

4.2 今後の課題

今後の課題としては、チェックシートの教科間の共有や自由記述欄などの内容の共有、授業改善や手立ての充実を図らなければならないと考えている。また、通常の学級における特別支援３つのキーワードのチェックシートの項目について、教科でなく学級活動の視点で書かれた項目が入っていたなど、効率よくチェックができるように項目の精査をしていく所存である。

チーム会の編成は有効に機能したが同時に多くの部会をまとめることで、チーム長の負担が大きくなる部分があった。継続して取り組むためには、研修内容の検討や組織としての動きを研究していきたいと考える。

そして定期的に実施しているあったかアンケートを有効に活用することで、教員だけでなく生徒への効果的なフィードバックもしていく可能性があると推察した。そのことを通じて指示待ちの生徒を減らし、主体的自発的に行動ができる場面設定を仕組んでいくことにつながることを目指したい。

謝辞

ご協力いただいた三里中研究推進委員会、教職員の皆様に心より感謝申し上げる。本研究は科研費（18K02793）の助成を受けたものである。

文献

[1] 海津亜希子、杉本陽子（2016）『多層指導モデル MIM　アセスメントと連動した効果的な読みの指導』学研教育みらい.

[2] 高知県教育センター、校内支援体制チェックリスト https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310308/tokushi-kounaishien.html.